VI　制度解説

1　予備選挙

（1）歴史的背景

過去20年間において、民主・共和両党の大統領候補者の中で、各党の予備選挙で多数を獲得することなく、大統領候補に指名された候補者はいない。予備選挙は、その政党の登録有権者に、自らの政党の大統領候補者に誰がふさわしいか表明する機会を与える。そのほとんどはさらに全国党大会への代議員選出の手段としても機能している。他の代議員は党員集会（Caucus）で選出される。

1970年代初めの民主党の代議員選出改革に至るまで、州および連邦政府の党指導者は、一般党員の意思を汲むことなく、党の大統領候補者を決定していた。そこで候補者は指名を受けるために、有権者ではなく、党指導者に支持を訴える必要があったのである。

予備選挙は20世紀以前には存在していなかった。そして大統領選挙の過程でその意義はゆっくりと増大していったのである。1950年代や1960年代でさえ、大統領候補者は本選挙に勝利する実力があることを党内に証明するために、しばしば２～３の予備選挙に出馬するのみであった。ヒューバート・H・ハンフリー副大統領は、1968年の民主党大統領候補に指名されたときは、一つの予備選挙にも出馬しなかった。

すべての州で大統領予備選挙を実施しているのではない。1992年には32州と首都ワシントンとプエルトリコで実施された。残りの州では党員集会方式によって代議員が選ばれた。1972年以来、党員集会よりも予備選挙で選出される代議員が多くなっている。1992年には85％以上の民主・共和両党の代議員が予備選挙で選出された。

（2）用語解説

予備選挙も党員集会も、普通は特に選出方式の区別が必要でなければ両者を一口に予備選挙と呼んでいる。

予備選挙も党員集会も、登録の要不要により、閉鎖的予備選挙と開放的予備選挙、閉鎖的党員集会と開放的党員集会とに分けられる。

閉鎖的予備選挙（Closed Primary）とは、特定の党に所属する有権者が投票して、党の全国大会に出席する代議員を選ぶ方式をいう。住民票を元に自動的に有権者へ通知が来る日本と違い、米国では通常、有権者は登録しなければ投票できない。この登録をするとき所属政党もしくは独立（無所属）を記入する。選挙人名簿には所属する政党名が記載される。

開放的予備選挙（Open Primary）とは、上記同様原則的には党員が投票するが、独立系の有権者もしくは他の党員であっても党の鞍替えをすれば投票が許されるものをいう。

閉鎖的党員集会（Closed Caucus）とは、特定の党の集会であるが、もともとは党の役員や貢献度の高い党員の話し合い、交渉の結果、党の支持する候補者を選んできた。最近は党員であれば参加できるようになり、支持する候補者を明らかにし、選挙人を選ぶなど

民主化されてきている。

開放的党員集会（Open Caucus）とは、クロスオーバーといい、所属する党とは別の党の候補者を支持するために、その党の選挙に参加することが許される党員集会をいう。登録をした有権者であれば、党の所属を明らかにしていなくても誰でも参加できる党員集会であるため、有権者登録の際、支持政党の明記を必要としない州に多い。

（a）狭義の予備選挙（Primary）

大統領予備選挙には２つの基本的なスタイルがある。一つは大統領候補選出予備選挙（直接投票方式）で、そこでは人々は大統領候補にふさわしいと思う候補者を直接選挙する。二つめは代議員選出予備選挙（間接投票方式）で、投票者が全国党大会の代議員を選出する方法である。

各州では、これらの方法をいろいろ取り混ぜて選挙を行っている。

ある州は、直接投票方式ではあるが、投票するのは全国党大会の代議員に対してである。そこでは特定の大統領候補者へ投票する義務が、代議員に課せられたり、課せられなかったりする。

またある州では、投票用紙に特定の大統領候補者への投票や支持が明記された代議員の選挙と、大統領候補者の選挙とが結合されている。しかし、このシステムのもとでは、州の党指導部は特定の候補者への支持を明確にしない代議員名簿を作成することができる。

ある州は、勧告選出選挙と区分代議員選出選挙を持つ。そこでは代議員は、ある特定の大統領候補者への忠誠や支持を明記されたうえで候補者名簿に掲載されたり、あるいは支持を明記せずに掲載されたりする。

ある州は、区分代議員選抜選挙とともに義務的選出選挙を行う。これらのケースでは代議員は予備選挙の結果を党大会に反映することを要求される。

多くの州は、予備選挙で大統領候補を直接選ぶが、そこでは投票者は各州の投票用紙に明記された大統領候補者を選出する。大統領候補者選出選挙では拘束をしたりしなかったりであるが、多くの州では代議員は、予備選挙で選出されても、それ以外のコーカスや州委員会で選出されても、たいがいは代議員を拘束する。代議員の任期は１回の選挙限りか、その候補者が選挙戦にとどまっている間に限定される。

予備選挙制度を有する各州からの代議員は、いろいろな方法で大統領候補者へ分配される。その方法はたいがい大統領選出選挙を基準とする。比例代表制、州単位のウィナー・テイク・オール方式（州単位で最も多くの票を獲得した候補者がその州のすべての代議員を獲得する制度）、選挙区と州単位のウィナー・テイク・オール方式（選挙区での最高得票者がその選挙区の代議員を獲得し、また州単位の最高得票者が全州選出の代議員を獲得する制度）、またはこれら三種類の組み合わせである。他の方法は直接予備選挙による個人代議員の選出である。ここでは選出選挙は拘束も候補者指名もない。

1992年初め、民主党は、公的に選出された代議員は、候補者の予備選挙やコーカス投

票の得票率に応じて分配されることを要求していた。（候補者は、しかしながら、代議員を獲得するには15％以上の得票を得なければならなかった。）

多くの州では1988年の民主党の候補者選出過程で比例代表制をとっていたが、フロリダ、イリノイ、ニュージャージー、ニューヨーク、オハイオそしてペンシルベニアの各州を含む大規模州では勝利した候補者に余分の代議員を与えていた。

共和党はウィナー・テイク・オール方式をとっていたが、これは候補者指名を早く終わらせるのに役立っていた。共和党は予備選挙を行う州に、代議員を比例的に分配するために、独自の敷居を設けることも許していた。多くの場合、その敷居は15％以下で良かった。たとえば1980年のマサチューセッツ州では、共和党候補は代議員獲得のためにわずか2.4％の得票で良かった。

予備選挙を行う州の約半分で、主要な候補者は州務長官や州の候補者指名特別委員会によって投票用紙に記載される。候補者の同意が必要とされるのは、ケンタッキー、ミシガンおよびノースカロライナの３州のみである。ほかの州では、候補者は自分の名前を投票用紙に載せるためには自ら発議しなければならない。そのためには一定数の有権者による署名を得た候補者登録の申請を選挙管理官へ送付し、登録料を払わなければならない。

伝統的に最初の予備選挙はニューハンプシャー州で、通常は２月中旬に行われるが、今回は本文記載のとおり、順序が入れ替わった。最後の予備選挙は６月の初旬に複数の州で行われる。予備選挙は、登録をした党の有権者のみが投票できるという点で閉鎖的である。２～３の州はいまだに開放的な予備選挙を行うが、そこでは有権者は民主・共和両党のどちらでも選択して投票できる。

（b）党員集会（Caucus）

党員集会は、有権者によって支配される開放的予備選挙と、党専門職員によって支配される州の党大会との中間層を反映させるものである。1970年代以前は州の党大会は候補者指名競争の中心であった。

予備選挙と比較すると、党員集会制度は複雑である。予備選挙が一度きりの投票で結果が出るのにたいし、党員集会は数週間から１か月にもおよぶ集会を経て結果が出るという点で多階層的制度である。

党員集会の運営方法は州によって異なり、また党によっても独自のルールがある。多くは、党の有権者すべてに公開された、選挙区ごとの党員集会や他の異なった形式の地域の大規模な集会で始まる。これらの集会はしばしば何時間も続くため、熱心で献身的な党員のみを引き付ける。参加者は表決に先立ってその候補者を支持する理由を討論する。その候補者の支持者は、他の候補者を支持する党員集会参加者に対し、立場を変えるように説得する。交渉と討論の最後に、選挙区ごとの会議は次の段階にどの代議員を送るべきかを票決する。

デラウェアやハワイといった小さな州では、代議員は全国党大会の代議員が選出される

州の党大会で、直接選出される。アイオワといった、それより大きな州では、少なくとも一つの中間手続きがはいる。多くの州では、選挙区ごとの党員集会でカウンティの党員集会に参加する代議員を選び、そこで全国党大会へ参加する代議員が選出される。

投票への参加者は、党員集会の最初の段階の参加者であっても、予備選挙の参加者と比較してはるかに少ない。党員集会参加者は、通常地方の党組織の指導者であったり、活動家であったりする。多くの一般投票者（rank-and-file voters）は党員集会を複雑で、混乱させるような、何かこわいものだと考えている。

党員集会の行われる州では、焦点は個人の選挙活動におかれる。（金銭でなく）時間はもっとも価値のある資産である。なぜなら組織と個人とに対する選挙活動はたいへん重要で、党員集会の行われる州では、早くから選挙戦のスタートを切ることへの批判は、予備選挙の行われる州での場合と比較してはるかに少ない。なぜなら、選挙母体のわずかな部分のみがほとんどの党員集会の行われる州で標的にされ、候補者は通常メディアをつかった広報活動はあまり行わないからである。

民主・共和両党で、党員集会の過程での基本的な方向性は同じだが、その運営の規則は大きく異なっている。民主党の規則は、草の根レベルの参加を求める国家的な基準を確立するため、1968年以来大きく改訂されている。共和党の規則は大部分で変化なく維持されており、代議員の選択に州の幅広い自由裁量が認められている。民主党のコーカスは民主党員にのみドアが開かれている。共和党は、州の法律が認める範囲内で、両党にまたがる参加（crossover）を認めている。

この党員集会で有名なのが、２月のアイオワ州の党員集会である。従来は同じ月のニューハンプシャー州の予備選挙が大統領選挙の皮切りとされていたのが、1976年の大統領選挙で、当時はまだ無名に近かったジミー・カーター候補が、ニューハンプシャー州の予備選挙に先立つアイオワ州党員集会で支持者を獲得し、その後の大統領当選に至る幸先の良いスタートを切ったのが先例となって、マスコミの注目が集まり、毎回前哨戦が行われることになった。雪に埋もれた穀物倉庫が点在する冬景色の中を、候補者は各地のロータリー・クラブなどを回って支持を訴える様子が全米的に報道される。党員集会の場合、予備選挙とは違って、有権者はわざわざ集会に足を運び、討議を重ねて支持者を明らかにしなくてはならないため、ここで鍵を握るのは組織票である。

（３）予備選挙制度の発達

大統領予備選挙は、今世紀初頭の進歩運動（The Progressive Movement）を契機に発達した。もっとも根強い進歩主義者たちの不平は、都市や州レベルの政治屋たちが党の指導者を選ぶ方法に対してであった。予備選挙のアイデアは、大統領候補者選出を支配する既得権を完全に無視し、それによって総選挙での人々の選択に制限を設けるためのものであった。

合衆国憲法には、実は予備選挙に関する規定はなく、実施方法は各州任せとなっている。

フロリダでは1901年に全米で最初の予備選挙に関する州法が成立した。オレゴンでは1910年に最初の「美人コンテスト」と呼ばれる、投票者が候補者自身へ投票できる予備選挙制度が成立した。1916年までに、25州で大統領予備選挙に関する州法が成立した。

しかし予備選挙に対する抵抗も存続した。第一次世界大戦や、1920年代の政治的無関心、あるいは大恐慌（The Great Depression）時代の経済的生き残りをかけたもがき等が、予備選挙制度の崩壊をもたらした。1935年までに、25州のうち８州で予備選挙に関する州法が廃止され、また、大統領候補者は存続していた予備選挙を無視することがしばしばあった。

1948年に、元ミネソタ州知事のハロルド・E・スタッセンは、ウィスコンシン、ネブラスカおよびペンシルバニアの予備選挙の勝利で、ほとんど共和党大統領候補の指名を獲得していた。彼はその後ロバート・A・タフト上院議員の出身州であるオハイオで敗れ、最終的に大統領候補の指名を受けたニューヨーク州知事のトーマス・E・デューイにもオレゴンで敗れた。

スタッセンの戦略は成功しなかったが、彼の活躍は予備選挙への興味を新しくした。２～３の州が1952年の選挙で予備選挙を復活させた。

1950年代や1960年代には、大統領候補指名政策はいろいろなものが混ざったシステムに発展していった。候補者は選挙活動を他の長所を補うことのできる２～３の予備選挙に限定した。たとえば選挙資金集め、保証、州や地方の選挙活動家の監督、宗教やイデオロギー上の特色、他の政治力と交渉する手腕などである。

混合システムのもとでの予備選挙の主要な機能は、候補者に対して有権者にアピールし、選挙活動を行う能力があることを証明するのを許すことである。1968年に、たとえば、リチャード・ニクソンは、1960年の大統領選挙と1962年のカリフォルニア州知事選挙での敗北にもかかわらず、自分は投票を無駄にする人間ではないことを証明するために一連の予備選挙の勝利を利用した。

混合システムのもとでは、予備選挙の季節を支配した候補者であっても、多くの州の党組織の結束を固めた他の候補者によって指名を受けられないことが有り得る。この党指導部の思惑で候補者が決まるボス支配の構図はつい最近まで続いたのである。

この転機となったといわれているのが1968年の民主党大会である。泥沼化するベトナム戦争への反戦運動の高まりの中、同年２月のニューハンプシャー州予備選挙で、反戦を主要なスローガンとしたユージン・マッカーシー上院議員の予想外の善戦をうけ、リンドン・B・ジョンソン大統領は部分的北爆停止と和平交渉呼びかけに踏み切り、同年の大統領選挙で再選を狙わないことを表明した。そして有力と見られたロバート・ケネディが凶弾に倒れ、反戦デモで荒れる歴史的なシカゴでの民主党大会で、予備選挙にまったく出馬しなかったハンフリー副大統領が大統領候補に指名されたことが、民意を反映しない候補者選びは不公平という主張を拡大させ、民主党の予備選挙改革につながり、これに引きず

られる形で共和党も予備選挙実施を推進したといわれている。

これらの改革への目覚めによって、予備選挙の数は急成長した。1968年から1976年の間に、その数は16から30と、ほとんど２倍にまでなった。大部分の州の党指導者は、大統領予備選挙の採用は、民主党の規則に必要とされた開放性を与え、それによって次の全国党大会で代議員に挑戦するのを避けるために最も簡単な方法であると感じた。

予備選挙の急増は直接民主主義の隆盛を助けたが、しかし予備選挙への参加者はまだ少なかった。全国の選挙権取得年齢の人口のうち、ざっと半数が1988年の大統領選挙で投票したが、しかしそのうちわずか20％が大統領候補指名の過程に参加したにすぎない。ほとんどの予備選挙で投票率は20％をわずかに上回り、また、一般大衆に対し参加の道が開かれている唯一の段階である第一回目の党員集会では大体は20％をわずかに下回るほどである。

2　党大会

（1）党大会とは

たぶん、全国党大会ほど、大統領選挙過程の特徴をよく表わしているものはないであろう。4年ごとに、各州の予備選挙や党員集会で選ばれた共和党と民主党の代議員が集い、それぞれの政党の旗印を掲げて秋の選挙に向かい、さらに11月に運が良ければホワイトハウスにまでそれを持ち込む2人を選ぶのである。

党大会の代議員は、さらに党綱領と呼ばれる、党の主要政策や、問題点に対する党の基本的な考え方を表明し、党の大統領候補に指名された者がそれに従う声明を採択する。集会は相当大規模なもので、対立する各党派が調停し、統一し、秋の本選挙に向け、熱気を生むのである。

両大政党が1970年代に代議員選出改革を採用して以来、党大会は審議を行う場であるより、メディア向けのイヴェントとしての性格が強くなった。自発的な熱狂の大部分は、現在ではテレビの観衆に向けて注意深く調整されたものである。投票における緊張感はほとんどない。1952年以来、民主党でも共和党でも、大統領候補者は最初の投票で指名されている。それでもなお、扇動的な基調演説や指名受諾演説が、大会参加者やテレビ視聴者を鼓舞している。党大会は、大統領候補と副大統領候補に、一般投票へ向けた選挙戦を開始し、党と一般に自らのリーダーシップ能力を訴える公開討論の場を与える。

19世紀には、全国党大会への州代表の割り当ては選挙人団の定式に従っていた。それは、連邦下院議員数の各州への割り当てを決めるための連邦憲法制定議会での偉大な妥協に従ったものである。二院制連邦議会として、下院は州ごとに人口に比例して議員数を配分し、上院は各州に2人の議員を割り当てた。このような妥協の下、指名大会での代議員数は、州の人口数の違いと、州権の対等さとの兼ね合いから、連邦議会での議員数の配分に応じて分配した。

20世紀になると、両大政党は選挙における州の貢献度を代議員数に反映させる公式を採用した。たとえば、1980年代に共和党は、州ごとの議員数に応じて代議員数を決定していた。州によっては、全州代表の議員のうち特定の何人かを割り当てられてさえいた。代議員の追加分は、共和党の知事および上院議員を有する州や、州議会議員数の過半数を共和党が抑えている州に与えられた。最後のボーナスとしての割り当ては、その前の大統領選挙において、共和党を支持した州にたいして与えられた。

近年、民主党は2つの異なる基本方針を有している。第一は、女性や少数民族を含む人口集団ごとに代議員を割り当てるために、少数派民族優遇政策（アファーマティヴアクション）によって機械的に振り分けることである。第二に、民主党は通常の代議員選考過程とは切り離して選ばれる党役員である特別代議員を何百人と選んでいる。

過去何年かの間で、党大会はその規模において劇的に拡大してきた。初期の党大会は300人以下の代議員で開催された。対照的に、近年の民主党大会は4,000人以上の代議員で開催されるのに対し、共和党大会は約2,000の代議員を集めるにすぎない。党大会参加者

をすべて合計すると、代議員、予備代議員、招待客、候補者、事務局スタッフ、何千人というジャーナリスト、および放送関係技術者などで、およそ20万人にもなる。20の都市で党大会が開催され、中には1度以上開催された都市もある。

（2）党大会の主要な内容

両党とも、党大会のスケジュールはだいたい似通っている。最近ではテレビ視聴者の注目を集めるため、スケジュールは合理化されている。

三つの主要な委員会が両党とも党大会の実務を執行する。資格委員会、綱領委員会、そして規則委員会である。これらの委員会は習慣的に党大会の前、たいがい1週間前に開催される。もっと最近では、民主党は党大会の何週間も前から委員会を開催している。

資格委員会は、党大会の代議員の間で発生した資格に関するすべての論争を点検する。委員会は各代議員の適格性に対して生じた疑問を調査し、その問題に関して最終決定となる勧告を出して、その代議員が党大会に参加し続けられるか否かを判断する。

規則委員会は、党大会の運営規則を決定する。予定を変更して党大会を運営することは、出費の変更に影響する。1976年にロナルド・レーガン氏は、もし自分が共和党の大統領候補に選出されたなら、ペンシルバニア州選出のリチャード・シュウェイカー上院議員をランニングメイト（副大統領候補）に指名する意図を表明した。そのとき彼は、ライバルのジェラルド・R・フォード大統領にも自分の選択する副大統領候補を明らかにさせ、それによってフォードを支持する代議員たちの一部がフォード支持を取り止め、自分が指名を獲得するのに必要な110の代議員を得ることができるように、規則変更を申し出た。しかし、フォードを支援する代議員たちは規則変更を却下し、フォードは指名を獲得することができた。

綱領委員会は、党大会に提出されて、採択を受けるための党の基本政策の声明文を用意する責任がある。なぜなら党の指導者は党内の軋轢に蓋をし、その基本政策においてできるだけ幅広いものであることをアピールしたがるため、党綱領はどちらかというと議論になりやすい。それにもかかわらず、その採択は苦い戦いの原因になりやすい。1948年に民主党が党綱領で強力な市民権を認める項目を採択したときは、南部の強い反対を引き起こした。そのときは、不満をもった南部民主党員が別個の政党を結成し、州権民主党として独自の旗印の下、サウスカロライナ州知事のJ・ストロム・サーモンド（現上院議員）を大統領候補に立てた。

全国党大会は、党大会の暫定議長が選任されるまで、党全国委員会の議長によって開会を宣言される。暫定議長は常任委員の推薦名簿が提出されるまで議長を務める。常任議長は候補者指名過程の議長を務めることで、意中の候補を助け、あるいは隠すための戦略的決定を行う。事実、常任議長はしばしば最も重要な大会役員といわれる。1930年代以来、連邦下院の党役員にとって、常任議長を務めることは慣習になっている。1972年以来、民主党はその役職を4年ごとに男女で入れ替えることになっている。

基調演説は、党大会の最初の重要な演説である。なぜなら、その任務は代議員の間に熱狂を巻き起こすことにあるため、基調演説を行う者は、その弁舌の技術によって選ばれる。そこでは委員会報告が読み上げられ、論争が解決され、本当の指名を開始するために道が清められる。

指名演説は公式な選出過程の開始を意味する。しばしばこれらの演説は極端に短い。過去何年も、その演説は非常に長く、さらに非常に多くの賛成演説があとに続いた。これらは、その候補者を支持する会場の代議員からの歓声でしばしば中断された。1936年にはフランクリン・D・ローズベルトの指名演説に対し、56回の賛成演説が行われた。

テレビの出現以来、短い演説と少ない賛成演説が奨励されるようになった。たとえばアーカンソー州知事のビル・クリントンは、1988年の民主党大会で、マイケル・デュカキスへの指名演説に15分しか持ち時間を与えられなかった。それにもかかわらず、やめるように訴える合図の動作を無視し、クリントンは30分間演説を続けた。

指名演説と、その賛成演説が終了すると、点呼が始まる。一般的には、アルファベット順に州の名が呼ばれる。自らの州の名が呼ばれると、州の代議員の議長は立ち上がり、代議員団の投票を行う。1972年まで民主党は単位投票規定の適用を認めていた。これは、各州の代議員団の全票は、その代議員団の過半数が選んだ候補者にたいして一律に投票すべしという規則である。ただし、この規定の採否は各代議員団の任意とされる。それ以来、代議員個人は自分の望ましいと思う候補者に投票できるようになった。共和党では、この規定の採用は19世紀中頃は禁止されていた。州は、投票をパスし、二回目の点呼を待つこともできる。

大統領候補者の指名が終わると、党大会は副大統領候補の指名に移る。公式的には、大統領候補は自らのランニングメイトの指名には何も言わない。たとえば、1920年の共和党大会は、大統領候補のウォーレン・G・ハーディングがウィスコンシン州選出上院議員のアーヴィン・L・レンルートを副大統領候補に望んだのに対し、それを無視して、マサチューセッツ州知事のカルヴィン・クーリッジを指名した。大統領候補は、副大統領候補に誰を望むかということすら問題にされないことがあった。その選択は党指導者の特権だったのである。

1940年に、フランクリン・D・ローズベルトが自分の選んだ副大統領候補である、農務省長官のヘンリー・A・ウォーレスを党大会が了承しない限り、3選目には出馬しないと威嚇したことで、この慣例は破られた。現在、党大会は大統領候補者の選択した副大統領候補を、機械的に認めるだけである。近年、大統領候補者は、党大会が始まる前に副大統領候補者を指名するようになっている。民主党では1984年にウォルター・モンデールが、1988年にマイケル・デュカキスが、それぞれ副大統領候補を早めに指名し、それによって党大会の議題を解消することで一致団結を訴えた。共和党では逆に、1980年にロナルド・レーガンが、1988年にジョージ・ブッシュが、それぞれ党大会まで指名を行わなかった。

副大統領候補者の指名過程を見ていると、指名演説、賛成演説、デモンストレーション、そして投票と、まるで大統領候補指名過程の鏡写しのようである。

党大会のクライマックスは、２人の候補者の指名受諾演説である。1932年にフランクリン・D・ローズベルトが民主党大会での指名を受け、急遽オルバニーからシカゴへ飛んできて受諾演説をするまで、党大会のプログラムにはなかった。1944年にニューヨーク州知事のトーマス・E・デューイが共和党最初の指名受諾演説をおこなった。今では指名受諾演説の草稿を作ることは、多くの執筆者を動員し、代議員団やある特定の利益集団の注意を引くことと同時に、何百万人というテレビの視聴者に訴えかけるため、大きな努力を払うものとなっている。

近年、党大会での演説は、候補者や党への歴代の貢献者の美徳を賞揚するフィルムの上映に取って変わられている。これらのフィルムは、ネットワークテレビを通して全米に放映されるため、放映費用のかからない選挙コマーシャルとなっている。しかし、1980年以来ネットワークテレビはこれらのフィルムの放映を制限するようになった。たとえば、1988年にNBCテレビは、20分の共和党のフィルムをわずか７分ほどにカットするまで、放映を拒否した。

（３）党大会の発展

大統領候補選出のための全国党大会は、最初の制度であるキング・コーカスの反動で発展した。初期のこの制度では、連邦議会議員集会や党指導者会議により候補者の選出を行っていた。しかしその非公開性はすぐに批判の対象となり、1824年のキング・コーカスを最後に廃止された。

反フリーメーソン党が史上初の党大会を開催したのが1831年９月で、13州からの代議員はウィリアム・ワートを大統領候補に指名した。国民共和党、後のホイッグ党は同年12月に党大会を開催し、ヘンリー・クレイを指名した。翌1832年５月には、アンドリュー・ジャクソンを指名するために民主党が会議を召集した。

党大会の開催は、1787年の憲法制定議会参加者たちが党派性に反感を示したことを拒絶することであったが、それでも国民の連邦主義の理想に合致していた。州は自分たちの好きな方法で代議員を選ぶことができた。しかし、ひとたび他州の代議員と会すると、駆け引きをしたり、自分の教区の利害より他州の利害を考慮するように強要された。

党大会は開放的な審議を行う制度である。党指導者は、どの候補者に票を与えるべきか、あるいは主要政策について、どのようなスタンスをとるべきか、何の考えもなく会議に出ることがある。これらの問題点は、論争し、駆け引きされるべきなのである。党大会は時折、ダークホース候補に浮上の機会を与えるほど十分に開かれたものである。ジェームズ・K・ポークは1844年の民主党の指名を勝ち取ったが、党をリードした最初の外部者であるとみなされている。

たまに、党大会は意見が紛糾し、党指導者は開会中大幅に引き留められることがある。

1860年に民主党は57回投票を行ったあと解散したが、それは党大会で採択された奴隷制に対する穏健な立場に抗議するため、45人の代議員が退出してしまい、どの候補者も必要とされる三分の二の多数を得ることができなくなったためである。翌月、党大会は再び召集され、イリノイ州のスティーヴン・A・ダグラスを二回目（通算59回目）の投票で指名した。

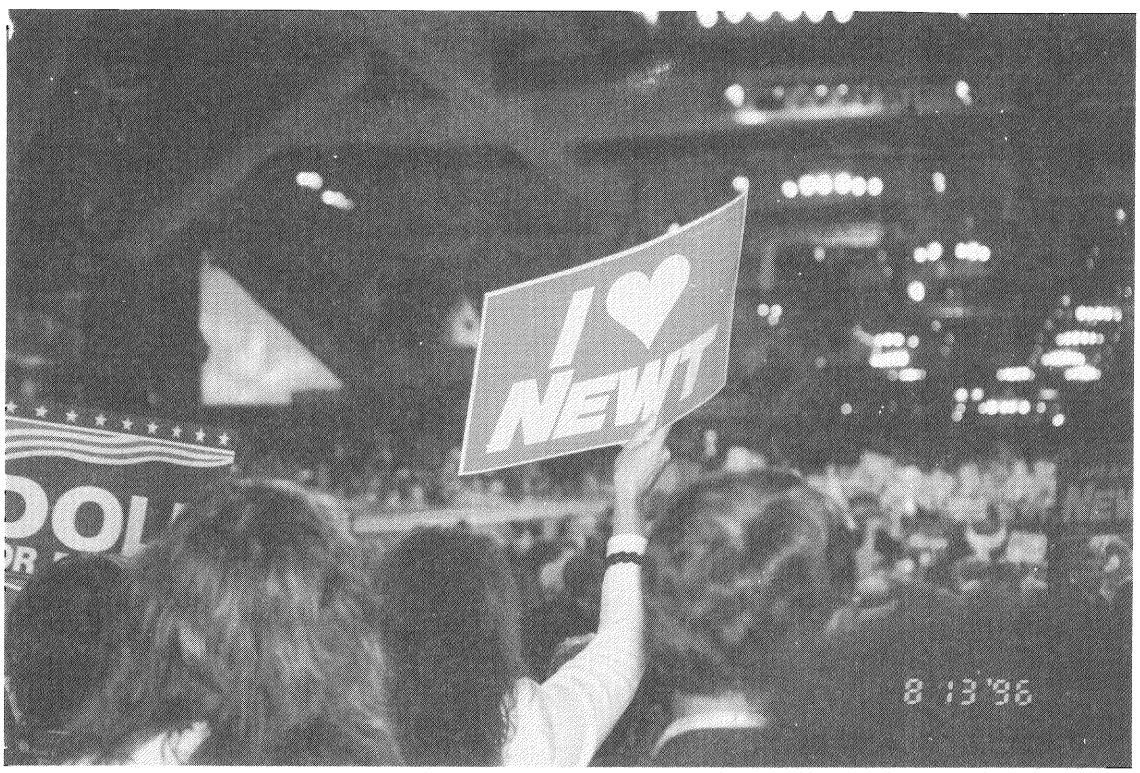
1924年の民主党大会は、ニューヨーク州知事のアルフレッド・E・スミスとカリフォルニア州のウィリアムズ・ギブズ・マッカドーの有力二候補が辞退し、ニューヨーク州のジョン・W・デーヴィズで決着するまで、うだるような暑さのニューヨークのマディソン・スクェアガーデンで開催され、17日間のあいだに、16人の候補者により、103回投票が行われた。

共和党の分裂は、1880年にユリシス・S・グラント大統領の三選と、1940年に政治にはまったくの素人だったウェンデル・ウィルキーの指名を拒絶した。

本人が気が進まないのに、候補に指名されることはまれである。最初のそれは、1868年に民主党が指名したニューヨーク州知事のホレイショー・セイムアである。彼は自分が指名されたことを知るや、「Pity me! Pity me!」（わたしをあわれんでくれ！）と叫んだのである。そして本選では、南北戦争の英雄であった共和党のユリシーズ・S・グラントに大差で破れた。ほかには、気の進まなかった候補が２人いる。ひとりは1916年に共和党が指名した最高裁判所判事のチャールズ・エヴァンズ・ヒューズで、もうひとりは1952年に民主党が指名したイリノイ州知事のアドライ・スティーヴンソンである。両者とも本選では負けている。

20世紀初めの州の大統領予備選挙の発達は、徐々に選挙民の意思を党大会に反映させるようになった。党の指導者は、自分たちが独自の政治判断を行うことより、世論の重要性にだんだん気がつきはじめた。第二次世界大戦の終了までに、党大会は候補者指名過程でのコントロールを失うようになっていた。

1952年のドワイト・D・アイゼンハワーとロバート・A・タフト上院議員との党大会での指名争いは重要であったが、結果は共和党の予備選挙の結果が具体化された。指名獲得へ向けた公開の駆け引きは、1956年の民主党の副大統領候補選びで見られたのが最後である。それ以後、有力な候補者は党大会以前に組み立てた連立状態を、党大会でさらに組み立てて行くことより、それを持続させなければならなくなった。民主党のジョン・F・ケネディ（1960年）、ジミー・カーター（1976年）、共和党のジェラルド・R・フォード（1976年）らの指名獲得は、党大会の初期の鍵を握る投票で支持率の低下を防ぐことによりもたらされたのである。


I ♥
NEWT
8 13 '96